これがオススメ！ 読み聞かせ本

中・高学年向き

学習指導要領で読み聞かせがすすめられて、読み聞かせについてのたくさんの本が出版されています。また、ブックリストもたくさん出ていますが、さて実際に子どもたちに読もうと思うと、どの本がいいのか、どうやって読んであげたらいいのか、困ってしまいます。「これなら楽しく読み聞かせができるよ」という本と読み方を紹介しましょう。

かあちゃん取扱説明書

いとうみく／作
佐藤真紀子／絵
（童心社）

高学年ともなれば「母親」のことをみんなの前で少しけなしたりする子もいます。「母親」は子ども時代の最大の存在ですから、密着度も高く、子ども側からの観察も多いわけです。大きくなってくれば「母親」の言っていることに疑問を感じたり、よその「母親」と比較したりと、客観的に見ていくことが多くなるので当然かもしれません。

この本の題名を紹介して、

「次からこの本を読み語りします」

とクラスの5年生に話すと、男の子を中心に歓声が上がりました。題名のもつインパクトの強さもありました。

最初に作文が出てきますが、作者が書いたのでしょうか。現役の小学生の文そのままのような気がします。聞いている5年生はここで大いに納得していました。

授業参観の教室の様子、それにお母さんたちのお化粧や香水のにおいのことまでよく感じて書かれています。

電話がかかってきた時の「よそ行きの高い声」など、まるで自分が観察されているような感覚です（一応私も母親ですから）。子どもたちは話を聞きながらそれぞれの母親を思い出しているので真剣です。

母親と子どもの関係、どちらの味方なのか、おおらかに家族生活を楽しんでいるユーモアあふれる父親。そして結局、「かあちゃん」は、愛すべき「大いなる母親」なのです。

子どもたちは物語を聞きながら相づちを打ち、ユーモアを感じ、幸せを感じると思います。元気をくれる物語でした。

文｜木村育子（東京都江戸川区立本一色小学校）　写真｜童心社－出版